

平成三年の思い出

三木 紀人

私がお茶の水女子大学に移ることが決まったのは、巨人の長嶋選手の現役引退のセレモニーが行われていたところである。その頃の私にとって定年までの歳月は気が遠くなるほどの長さと思えたが、以後二十六年たってみると、その間のことは一夜の夢のような気がする。

大学院の日本語教育コースの前身、日本語文化専攻(「日言」また「言文」と言つて、略称が定まらぬまま名が変わつた)が発足した平成三年などは特に「夢の中にも夢を見るかな」(慈円)といったおもむきである。ある種の夢は現実には接した風景よりも鮮烈に脳裏に残るものだが、この年のことどももそれと似て、多くの場面が臨場感とともに記憶の中であり、今後もそうありつづけるのではないかと思つている。例えば、四月十八日、一期生の合格発表の日に、合格の挨拶にかけつけてくれた面々(いずれもしかるべきポストで目下活躍中である)の将来への緊張

と不安をたたえた喜びの表情、その夜に学長・事務長・関係教官数人で行つた新専攻発足を記念するなごやかな会食、二十二日の入学式とオリエンテーションで接した新入生ひとりひとりの容易ならぬ迫力などなどである。ちなみにこの年の新入生は受験生約七十人のなかから選びぬかれただけあつて、学力と経験がゆたかで、平均年齢は博士課程(人間文化研究科)のそれを若干うまわつていた。

その人々とかかわつた授業は「日本語文化学演習」である。これは日本文学専攻の「中世文学演習」と同じもので、二専攻の学生の相乗りの上に、助手・博士課程学生も加わつて実にぎやかであつた。「雪と日本文学」のテーマ(雪にちなんで「白」を主題にするのも可とした)で一人一回完結の形で各論を展開してもらつた。数年後に、T・Aであつた学生が調べた所、一年目の発表からいくつもの雑誌論文が生まれていた。それだけ内容のしっかりしているものが多かつたのである。雪をとりあげたおかげでその演習の時間は夏も暑さを忘れがちで、演習のあつた木曜の午後は一年をとおして雪が降つていたようなシュールな印象さえあり、夢と似た感が一段と深い。